

昭和四十四年二月二十三日 第二十四回

岩槻市

慈恩寺観音

等史跡めぐり資料

玄奘三藏の十三重の塔

越谷市郷土研究会

# 新編武藏風土記稿卷之二百二

## 埼玉郡之四 岩槻領

○慈恩寺村 慈恩寺村は江戸より行程十里、太田庄に屬す、此邊箕輪郷の唱あり、村内慈恩寺は古蹟にして、しかも大刹なりしかば、その境内山林田畠のかゝれる所はいつとなく慈恩寺村と呼なはせり、戰爭の世を歴てしばく兵火に罹り、寺産もおのづから衰微せしかば、田畠も昔に似ず、御入國の時百石の御朱印を賜ひ、餘の地は御料所となりしに、寛永年中其地を阿部備中守に賜はり、下總國古河城附の村となり、天和二年に至りて、寺領の内のみを別て舊に從て、慈恩寺村と號し、其餘備中守領内に屬する地も、二つに分ちてかの寺領にはあらざれど、表慈恩寺・裏慈恩寺と唱へ來れり、されば元祿の改めにもとより三村にわかつのせたり、民戸六十三、慈恩寺村入會の地なれば、境界もたしかにわかつがたし、凡東は小溝村、西は古ヶ場村にて、南は表慈恩寺・上野の二村に接し、北はまた表慈恩寺村なり、四方の丁數も大槻八町程、もとより慈恩寺の領にして今もしかり、こ

は天水場なり、此餘藏助新田と號するは、享保十七年下野田村の民藤助と云もの開墾し、同き年寛播磨守檢地して貢稅を定めし新聞地なり、其後いつの比にや、故有て當村の持添となれり、

### 高札場

小名 大門 小路 堂前 小路 入 小路 山口 小路

慈恩寺 天台宗、東叡山の末、華林山最上院と號す、當寺古は坊舍塔頭も多く、天文年中太田源五郎資正より與へし寄附狀に、慈恩寺は本坊四十二坊新坊二十四坊云々とあるにても、大寺たりしこと知らる、今も境内廣く塔頭九坊あり、開山慈覺大師日光山に登りし時、一の李實をもて佛法弘通の地に至て生すべし、予其處にて法を弘めんと云て、彼李實を投ぜしかば、虛空を飛行し當所に落て芽を生じ繁茂せりと、この事は例の佛者の説にして信すべからざれど、此地は昔より李樹多くして今も繁茂せり、故に華林山と號すと、又大師日光山より當所に來れる時、一人の老翁あり、彼翁云、予師を待こと久し、斯に毒龍のすめる地あり、人民これがために苦む、大師此患を救ひ賜へと云し所を逢山の原と唱ふと、此事蹟もいかゞはあらん、傳ふるまゝを記せり、當寺に東照宮御位牌あり、寛文十年御供料として、二十八石四斗九升餘を御寄進ありしより今も替らず、又太田氏よりの文書一通を藏す、其文左に出す、

武州太田庄慈恩寺者、本坊四十二坊、新坊廿四坊也、此内十八ヶ坊、或者破戒之徒、或者濫江家風之仁拘

# 慈恩寺境內之圖



來、彼十八坊之事至于資正代改之、六十六坊皆以當  
寺江奉寄附實也、於子孫不可有違亂候、祭禮勤行等  
不可有怠慢、仍寄進狀如件、

天文十八己酉年九月三日 源資正花押

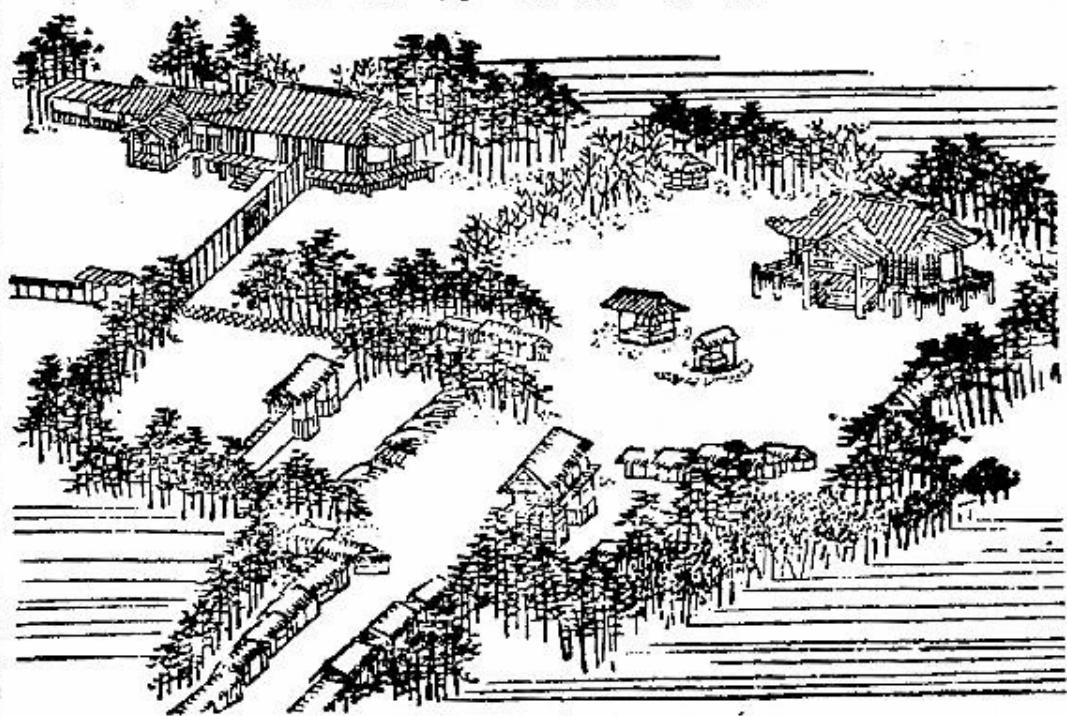
慈恩寺衆徒中

客殿佛院を本尊とす、外に不動を安ず、開山堂開山慈覺大師の像を置り、鐘樓寶勝四  
の鐘 経堂 念佛堂 如法經堂 觀音堂坂東の札所三十三番の内第十二番  
にして、昔の本尊千手觀音は、慈覺大師の作にて立像なりしが、寛永の比焼失せし時、天海僧正比叡山より持来て安置す、則今の觀音にして坐像なり、此堂元は塔頭櫻本坊の持なりしが、今は本坊の持となれり、堂前に燈籠あり、南壁鐵にて礎石と笠石とは後に造りしものなり、左の銘を彫れり、

## 燈籠銘

扶桑國關以東武州路、埼玉西郡岩付、爰慈恩教寺者、  
光世□之□古道場也、爰關東國元帥令弟、北條氏房  
爲三岩付城主、其股肱臣伊達與兵衛尉房實者、慈恩雜  
掌也、令ト金工鑄ニ燈籠一箇ニ造。彼堂前より加旃拵錢焉、  
燈明萬代不滅計、伏願國家安寧唱ニ太平之歌、風雨  
調順、得ニ萬民之樂、君臣道合、子孫日多、文武山  
高、福壽海深、遂ニ一得三十德、作ニ偈ニ其銘ニ曰、  
進善鑄之又施錢、燭煙日夜在堂前、節令、者之然燈

觀音堂境之内之圖



佛一段光明世界子、  
天正十七己丑五月如意日

伊達與兵衛尉房實施焉

地藏堂 閻魔堂 畏沙門堂本尊千手觀音を安ず 十二天社 本坊の  
の鐵守なり、慈恩寺三村 上院權現社觀音堂の東方沼の端によりて 一に三社權現と云、神  
司三浦修理は當 寺の支配なり、神明社 八幡社 山王社 愛宕社 辨  
財天社 宇賀神社 二王門 塔頭 遍照院 幡崎坊  
關伽井坊 賽光坊 櫻木坊 松井坊 東榮坊 池之坊

本願庵

○觀音院天台宗慈恩寺の末、本尊不動、

○表慈恩寺村 表慈恩寺村も江戸よりの行程、庄名等す  
べて前村に同じ、三村に分れしことは前に辨せり、民戸  
六十二、四方の境界も前村にいへる如く、三村に分ちた  
る地なれば、分明には云ひ難し、大槻東は徳力村、巽の  
方は花積村、南は平野・上野の二村にて、西は黒濱村、北  
は慈恩寺村なり、東西二十町、南北十四五町、村の西に  
日光御成道あり、道幅七間許、用水は黒沼用水を引用ゆ  
こゝも往古は岩槻太田氏の所領にて、御入國の後暫く御  
料所なりしが、寛永の頃は阿部對馬守領分に賜はり、同  
五年同人検地せり、この後久しく岩槻城附の地なりし  
に、寶曆六年より御料となり、同十三年大岡十三郎・服部

傳右衛門檢地し、明和七年松平大和守に賜ひしより今も替らず、此外新田ある所は大和守檢地せり、

高札場村の中程にあり

小名 中通り 原通り 向山 立野 謙訪下 楢山

内子 赤坂

元荒川 村の西方より南を流る、幅二十間餘、

謙訪社 慈恩寺の持

常源寺 禪宗曹洞派、岩規宿龍門寺の末、慈眼山と號す、本尊阿彌陀、開山は本寺第五世徳外堯天なり、元和九年十一月十一日示寂、後村民山崎氏の先祖、山崎源左衛門といへるもの、堂宇を再造せし故中興開基とせり、此人は寛永十一年十一月七日死し、葬樹宗述と法諭せり、

○阿彌陀堂村民の持

○裏慈恩寺村附持添新田 裏慈恩寺村は民戸六十四、東西七町、南北十町、南は慈恩寺村、西は相野原及古ヶ場・上野の三村、北は鹿室・内牧の一村にて、東は小溝村なり又上野村の西元荒川の邊に飛地あり、小名立野といへり

村の西方を貫て日光御成道係れり、三沼代用水を菖蒲町より引來て用水とす、當村領主の遷替檢地の年月等前に同じく、明和七年松平大和守に賜ひしより今も替らず、この外村の北に當村持添の新田あり、黒沼新田と呼べり享保の頃開けし地にて、同く大和守の領となれり、

高札場村の中程にあり

小名 上手組 下手組 蓼臺 新房

元荒川 飛地の方に係れり

子神社 村民の持

阿彌陀堂 寛永五年村内里正所左衛門が先祖、勧請せり、

舊家者關根所左衛門

當村の名主なり、先祖關根綱部勝直は廣澤尼張守重信の二男にして、太田氏

房に從ひ後高野山に入て死す、勝直の子大炊助滿親は、幼年より隣村上野村實性寺に入り、成長の後民間に下り慈恩寺村に移り、慶長の頃表慈恩寺村及當村且花積村等三村の内にて數十石の地を開發し、元和八年二月十二日死す、夫より數代を経て今の所左衛門に至れり、彼れが祖父所左衛門奇特の明ありて、寛政三年時の領主松平大和守より苗字帶刀を許し且其行の奇特なるを褒賞ありし山【孝義錄】にも見ゆ、又青柳村に關根氏の舊家ありて、廣澤氏より出しといふ同家なりやされどその傳ふる所の名はたがひに異なり、

## 華林山慈恩寺縁起

一、武州埼玉郡太田庄岩附花林山慈恩教寺は慈覺大師諱圓仁の開基也。抑大師は崇神天皇の後胤なり。幼齡の初より聰明絶倫なるにより寂岳に登り、傳教大師に使へ給へる最渴瓶の上足として入唐求法の大儀を遂げ、顯密二教の奥旨を究め給へる高師なり。其智德行相の至れる事は僧傳に見へたるがごとし。當寺は人皇五十三代淳和天皇天長年中の草創也。然るに大師適々關東の靈地名山を見めぐり給ひしに、下野國日光山によちのぼり三の嶺三の社を普く拜し給ふに東國無双之靈山なる事を感じ、いよ／＼往昔の勝道聖人の遺址を尋、漸麓に下り山苔の橋の邊に佇み三寶諸天を仰ひて、なをも東國の中佛法弘通の靈場を示したまへと至心に祈念し、こゝろみに携へ給へる所の一顆の李を虛空に向ひ擲給ふに、忽ち紫雲これを卷いて東南の方へ飛さりぬとなん。

一、大師日光山を立出たまひてそれより所々を經過し給に、武州埼玉郡岩付云所に到りぬ。或曠野の中に出給へば一人の老翁忽然として來り、吾師のおはするを侍事年久ければ此所は正しく三寶相應の勝境なり、師こゝに止りて佛法興起し給ふべし、此所に毒龍住る池ありて人民を懼しきをびやかす事若干なり、是によりて此郷の民わづかに家十ばかり残りけり、それらだに物うし請ふ師是をあはれみすくひ給へ我も猶力を添たしといふ。されば今に至りて此所として十人方となんいひける。又老翁と大師と初めてあひま見え給ひて、爰に開基の御心ざし定め給へる所なれば、こゝを名付て逢山の原とは申傳へ侍り。

一、大師彼老翁にのたまひけるは、我元よりたつる願有りて所々を尋ね巡りけり、その印なくば開基の心

さしもまた空しかるべしと有ければ、翁の申けるは、此頃所に一の不思議あり、住めるあたりちかく一夜の李の樹生ひ出枝葉繁茂し花咲實事今なを盛なり。大師悦びて御氣しきにのたまへば吾期する處は是也。それ木の下に誘ひ給へと翁を連れ行給ふに、又一の白狐走り來り導ひて彼樹の下にいたり、大師老翁に語り給ふや、我去りし頃ほひ下の野州二荒山山すその橋のあたりより祈願して試見になげたりし菓今此に生ひ出てその奇特を現す事、則是諸天善神の示し給へる所なりとて、歡喜のまゆをひらきまします。されば此李樹は當寺の瑞木なりとて、堂塔の庭、社頭の瑞籬、僧房・民家に至るまでこれを移し植るの故に、李樹常にさかへるなり。高花香時に薰郁なりこゝを観して花林山とは云也。又老翁師に告げていふやう、先に申傳る毒龍の住ける池はあの一村の森の木陰也、師の行徳を施して彼を降伏し早く佛法興隆の靈地と成し給ひ、又此車は則天の寶器也これに乗移り給はゞおのづから彼池のほとりに至り座すべし、吾は是此所の守護神十二天のその一神なりとて、大杉の下にかきけしてうせにしが。

一、大師十二天の示現にまかせ彼の車に乗り給えば旋轉する事御者のやるがごとし。又何くともなく三つ足のありける雉子師の前に飛來りて道しるべし奉れば、程なく池のほとり水の面を見やり給ひば、俄かにありますさましく風起り波立て忽に二十尋ばかりの大蛇池上に現れ、師を目がけて直路に陸に至る。大師密語印契を以是を加持降伏し、速に池へ追ひ返し給へり。是よりして其所を名付て蛇追ひとなん云傳へ侍る、されば彼の車は當山の吉凶衆徒の終焉を知らしめ給ふ前表として今に至りてかならず虚空に轟き聞ゆる也。ゆへに是を十二天の車とて當山不思議の一と申傳へ侍る。

一、大師當山鎮護の爲にして池の汀巽の林の門にて三七日の間瑜伽三密壇場をかまひ、不動護摩の秘法

を修し給ひ、こゝに一人の少女來りて朝な／＼闇伽之水を捧げて念比に仕へ奉りければ、大師彼女に尋ね給はゞ汝は何くより來れるや。女のいふやう吾は是此池にある潛童也、今師の御修法ありがたく覺え奉りて朝な／＼捧ぐる水は天竺無熱池より通る所の闇伽の水なり、師かさねて示し給はく、善哉汝結縁むなしかるべし今その形をあらはすべし、汝の爲に利益を施さんとのたまへば、彼の女果して數丈の驪龍と成りて護摩壇の前に頭を低る。時に大師洒水を以て頂にそゝぐ、五鉢杵を以加持護念し給ひければ、龍女申して曰く、吾久しく惡趣にあつて苦を受けること極りなし、今幸に師の濟度化益に預り永く出離の身となる事多生劫の悦びなり、師の恩徳を報せん事如何ともせんかたを知らず、然ども修し給ふ所の護摩の灰を與へ給はゞ吾得脱のしに擬へて此池水に七つ島を浮ふべし、猶又年々に龍燈を擎げて佛閣社頭を耀すべしと堅く誓約を致しければ、大師則大約をもつて爐中の灰を救ひてこれに與へ給へりとなり。さればむかしより今に至りてかの二つの誓約をたがへずして修法の度毎にその印を見せける事誠に奇異の現證なり。

一、かくて護摩修法事終りぬれば、師池の北の岸に移り給はんとするに、水深ふして底を知らず求むるに船なし。こゝに身には甲冑を帶し手には寶棒を持る人雲中に現れ出で、師我に從ふて渡れよと忽ち池の南北へ藤のかつらを引はへ給へり。大師則ち是をわたりてたやすく池の北のきしにあがり給へり、これを谷渡の藤となんいひける。其根は南の岸に有て水底をくぢりつらぬく事凡數百歩に及んで、その末は北の岸に出たる今も猶朽せずしてあり。

一、援彼寶棒もたるあやしき人師を大きな杉のもとに誇ひて告て曰く、此靈木を以て千手觀世音の尊

像を彫刻し當山の本尊と崇給はゞ、かららず大悲の利生廣大にして永く無垢清淨の梵刹たるべし、我れ  
は是佛法擁護の毘沙門天也、今より垂迹の光を和げ當山鎮守の神と成るべし。是故にこゝに宮作りし  
上院三所權現と勸請し奉り、毎歲不易に十月十六日を會日と定め、前後三日三夜の間祭禮奉幣をなし法  
施供養を致す、これを小春會式と號せり。近隣他境數十里の堺貴賤道俗晝夜をわくるなく歩を運び群集  
をなせり。

一、毘沙門天王の告勅を受給ひて大師彼の靈木を撮つて千手千眼の尊像を彫刻し、則大堂に安置し奉り  
當山の本尊と恭敬供養し給へり。故に靈瑞感應日に新におはします。されば今正に坂東十二番の巡禮所  
傳りぬ。かくて又其のあまりを以て大師自の影を鏡に移し作り置き給へる影像なるの故に、これを鏡の  
御影と崇め奉るなりなん申して、今なを當寺開山の尊影と崇見奉るなり。

一、然るに大師首楞嚴院の法式を移し池の汀に普賢の道場を嚴り、清淨結界の地をトして一夏九旬の間  
六時の懺儀を修し四種三昧之法要を行し、石の墨草の筆を以て法要の妙典を書寫ありて寶塔に納め供養  
し給へり。此時に池の面いと清らかに水澄わたり多くの小蛇浮び集りうき島に似たる物を七所に被きあ  
げたり。是はこれ彼龍女得脱のしにとて乞ひ奉りたる護摩の灰にてぞ有ける。されば一夏九旬の修  
法によりて浮べる島なれば是を夏島とは申傳へたり。また此法要を如法經の大法とて、今の世にいたりて  
此法を修行すればかならず夏島を浮べあらはす事猶ちかく比その驗證いちじるし。諸國巡禮の者までも  
うかぶ夏島の言の葉を三十一文字につくりて、遠き境ちかき里人のいとたふとき事にぞ語り傳へ侍る。

### 巡禮の行者の口すさむ歌

慈恩寺へまいる我身もたのもしやうかぶ夏島を見るとにつけても

一、一日大師池の邊に遊観し給ひけるに、天女卒然と現れ出で、師に對して曰く、吾儕此所にありて師の行化に力を加へ伽藍安穩眞俗常住の護と成べしといひしかば、やがて池の汀に一つ島を築き辨才天女を安置し奉り、其側に大師御手から一本の松を植て令法久住の例にそちかひたまひける。又此手洗の池は其形半鏡のごとくにして其風景大唐の大慈恩寺に似たりけるとて當山を慈恩寺とは稱し給へり。殊更池の南の水迄には富士の山影を浸けり、誠に郡國邑里の堺を隔てかくのごとく不思議ある事は是勝境他に異なる所以也。しかのみならず龍燈の光は折を待す時をたがへず堂塔と社頭を耀せり、是又大師利物の恩徳を報せんとおもふて龍女のさゝぐる也といへり。

一、大師當山草創の祈願として預め護摩の秘法を修し給はんさせし時、郡司某來りて大師に見え奉りて、師の教化を蒙りて是より歸依渴仰の心ざし倍厚ふして香花燈明等の種々の供養をなん成し給へり。しかのみならず若干の財寶を喜捨し修理土木の功成て神社佛閣の營造悉く事畢りぬ。こゝにおいて大師の宿願も満て給へり。されば郡司世を去り給ひし後彼難の事を司り給ふを感じて難司權現を祝ひ奉り、護摩修法の林の中に宮居し奉る。是正しく大師の御遺命によれりとかや。

一、淳和の御宇天長年中の末つかた、當山本堂の上にあたりて一村の雲のごとくなる物難難おふへる事七日七夜、能くこれを見れば凡三拾尋ばかりなる幡にぞ有ける。近隣他郷の者まで走り集り實に奇異の思ひを成なし、こゝに一人たけきものゝふありて試に弓矢打つがひ空さまに射けるに旗の一手をなん射落しぬ。此落止りたる所を幡ヶ崎坊と名付けて一坊の地とは成けり。扱もこの幡は忽に翩翩して相州日

向の薬師の山寺に落止りて今に彼の寺の重寶とはなり侍りぬ。

一、又何の比に有りけん當山本尊觀世音菩薩或時塔頭の僧侶何がしに託し給ひけるは、今汝に奇妙の一藥を授くべし、されば此地の井泉は昔日慈覺大師修法のはじめ汲せ給ふ所の靈水也、此闊伽井を以て此藥を調合し諸人に施し與へば其邪熱疫氣の惡病を拔除する事速にして心神安樂なることを得せしめんと示し給ひしより、以來此妙藥を以て普く施し與ふるに、其受る所のやまひ平癒せずといふことなし。此故に近里遠境よりこれを乞ひ求る事すくなからず。誠に拔苦與樂の御慈悲こゝに及べる事有がたゝこそ覺ゆれ。今闊伽井の坊といへるは是なり。

一、抑當山の本尊は慈覺大師自ら手から刻み給へる所の千手千眼觀世音菩薩なり。此故に惠み高く國土を照し慈眼普く群生を視給ふ。實に夫他に異なる靈刹にして其山は七不思議の相を備へたり。所謂第一に夏島、第二に李樹、第三に龍燈、第四に富士山影をうつし、第五に谷渡の藤、第六に雉子白狐、第七に寶車也。其のくはしき事は前に著す所のごとし。又寺院の方境は八葉蓮臺を像り土地の景色はおのづから四神相應せり。衆徒は六十六坊を居て六十餘州の鎮護を致し、神社は三所權現を崇て三寶常住の丹誠を勵す。こゝを以て毎歲不易に仙洞講の儀則を莊り、小春會の神事を催し、益興隆佛法國家安全の懇祈を抽んで、彌佛語の供養神祇の祭祀忘ることなく、顯教の法軌密乘の修練月々に盛に年々に嚴かなる事かな。

天明八戊申正月吉日、縁起寫之

(南埼玉郡慈恩寺村慈恩寺藏本)

## 慈 恩 寺 觀 音 (字慈恩寺) 岩槻駅から5.4キロ

慈恩寺觀音は天長元年慈覚大師の創建にかかり、大唐より帰朝後、当寺が唐の慈恩寺に酷似せるを以て秦して慈恩寺と号したといふ。本尊は自刻の千手觀音である。その後天文18年岩槻城主太田資正が本坊四十一、新坊二十四、即ち八十六坊を建立せしめたが、偶々文政11年火災に罹り、堂塔が鳥有に帰した。天保14年住僧深乗がこれを重建して今日に及んでいる。主なる堂宇は本堂、開山堂、如法經堂、金仏堂、毘沙門堂等である。

境内にある南蠻鉄の燈籠は天正17年伊達興兵衛房実の寄進で逸品の骨董があり、また弘安、乾元、建武の年間に建立した板碑などもある。寺宝としては、公寛親王筆「法華經」、慈照親王筆「陀子の大額等がある。なお当寺の觀音は坂東三十三所の第十二番札所、属は天台宗。

太田道灌親子が岩槻城の鬼門に當るので老臣伊達与兵衛に奉行せしめたのである。

同寺の南の方稚司山に屹立する十三重の塔には、玄昉三藏法師の靈骨を奉安さる。根津嘉一郎寄進。塔の高さ50尺。昭和28年5月8日建設法要式挙行。主塔設正工学博士伊藤忠、総工費1200万円。寺宝として觀音堂、千手像、南蠻鉄の燈籠(伊達与兵衛房実寄進)、太田資正の寄進状、其他。

〔新編武藏風土記稿〕(大百科事典)



慈恩寺觀音本堂



玄昉三藏の十三重の塔